

表紙は語る 表紙は語る



Mr.Children [New MAXISingle]

四次元 Four Dimensions

- 1.未来 (ポカリスエット CM ソング)
- 2.and I love you (日清カップヌードル「NO BORDER」CM ソング)
- 3.ランニングハイ (映画「フライ, ダディ, フライ」主題歌)
- 4.ヨーイドン (フジテレビキッズ教育番組テーマソング)
- 5.ヨーイドン (Instrumental)



Mr. Children のニューシングル四次元は「よんじげん」と読むのがお約束。

四次元 よじげん・fourth dimension

三次元の空間に第四次元として時間を加えた、相対性理論で用いられる概念。

四次元 よんじげん・four dimensions

思考形式を表す立場や、その着目面。

こんなふうに考えることもできるんじゃないでしょうか？

【ミスチルの戦略】

現在の J-POP 業界は 1990 年代の CD バカ売れ時代から比べると、その売り上げを格段に落としている。その理由としては MP3 の登場、違法ダウンロードサイトの多さ、主要購買層の若者が出費の大半を携帯に使うことなどいろいろあげることができる。今年の 1 月 1 日にテレビから突然流れてきたカップヌードル「NO BORDER」の CM。それを皮切りに 5 月 1 日にニューシングルの発売告知があるまで、ポカリスエットの CM、ポンキッキの主題歌とメディアになんとなくミスチルの声が聴こえる状況をかれらは作ってきた。発売告知から発売日までが二ヶ月近くあるというのも異例の長さ。つまり 1 月 1 日から 7 が月間もの長い間「四次元」の宣伝を知らないうちに聴いていたことになる。ミスチルはあまり売らずもがなの宣伝を好まないバンドだと思っている。7 ヶ月間小出しにしてきた楽曲たちはどういう形で発売になるのかファンは注目していた。それを 4 曲入りで一挙発売。出し惜しみしない潔さがある。だいたい 4 曲手元に楽曲ができていた場合、2 曲入りシングルとしてばらけて売ったほうが、ミスチルのようにすでに固定ファンを持ち、初動（発売から一週間の売り上げ）枚数が全売り上げの半数を占めるミュージシャンにとっては、売り上げ枚数は上がるし、金額的にも大きいものになるはずだ。1990 年後半

のラルクアンシエル、GLAYのように三週間連続シングル発売も可能な楽曲数だ。最近の音楽業界でも立て続けのCD発売ということはあまり珍しいことではない。そうすることによって話題性も大きくなるし、ランキング番組などに長期間登場することができ、旬の交代の早いこの業界にあって忘れ去られる危険も防げる。1年以上もの長いリリース期間をおくということは一線で活躍することを願うミュージシャンにとってリスクもまた大きいのだ。

大人たちはなぜBORDERを喜んで対立するのだろうか。なぜ戦うのだろうか。世界では今日もあちこちで戦争が起きている。勝つても負けても多くの犠牲者を生み出すことに変わりはない。そして、一帯の犠牲者はその国の子供達だ。戦を止めた子供は、戦と時に成る難れ難い生活を余儀なくされている子供。日本ならゲームやパソコンに夢中な子供達だが、戦争に怯え、戦場をさまよひ、凍死へと追い込まれていく。そんな過酷な環境に生きる子供が、世界には本当にたくさんいる。でも、そんな子供達も笑顔を見せてくれる。無防備な、真実な、すばらしい笑顔を見せてくれる。この笑顔を守る権利は誰にもない。僕たちはこの笑顔を守らなくてはならないと思う。子供達の笑顔は、この世の未来だ。NO BORDER カップヌードル。 <http://cupnoodle.jp>

**傷つけ合うためじゃなく
僕らは出会ったって言い切れるかなあ**

絆の深い固定ファンを多く持つ、限られたミュージシャンにだけ許されたことなのかもしれない。宇多田ヒカルを例にとれば 1998 年オートマチックで大ブレイクし、あくる 1999 年から 2001 年の三年間で 10 枚のシングル（延べ数・年 3 枚）を発売というペースになる。この三年間に固定ファンを増やし、その後は年一枚ペースのゆったりとした仕事をしている。ブレイクからビッグネームへの転身を三年間で見事に果たした。では浜崎あゆみはどうかというと、女優から歌手に転身しデビューした 1998 年にシングル 5 枚。翌年大ブレイクし、年間 7 枚のシングルを出し、昨年までの 7 年間でシングル 48 枚、アルバム 28 枚を発売している。これでは飽きられてしまう日がきても仕方ない。エイベックスという所属レコード会社の方針であろうが、走り続けたあゆも少々気の毒な気もする。エイベックスと言えは早くから C C C D（コピーコントロールCD）を採用し、所属ミュージシャンの楽曲の違法コピーを防いできた。しかし消費者側からの共感はずっと得られず、ここにきて C C C Dをやめざるを得ない状況に追い込まれた。この程度の違法は若者にとってはMDに落とすのと同感覚であるということなのだろう。ミスチル所属のトイズファクトリーは、はなからこの方式には賛同せず、従来通りのCDを制作してきた。違法コピーを



防ぐことに夢中になるより、どんなにコピーが出回っても、それ以上に売れる楽曲を製作する姿勢こそが大事なように思える。レコード会社の心意気というのもまたミュージシャンに影響を与えてしまうのかもしれない。とにかくニューシングル「四次元」はミスチル1年1ヶ月ぶりの4つの違った次元の曲をおさめたシングルCDだ。過去にケ

ミストリー、浜崎あゆみらが 3 曲 A 面シングルを出し、浜あゆにいたっては 10 曲くらい入っているものをシングルとして世に出している。今回の「四次元」の場合は 4 曲全て A 面と呼ぶこともでき、4 曲全曲タイアップ付きであることから話題性から言えば十分だ。けれど話題性や曲数の多さや宣伝期間の長さで CD が売れるかというわけでは



そうではない。シングル CD と言えば A 面とカップリングの 2 曲が収録されていて、A 面の曲がタイトルトラックになるのが通常だ。「四次元」にはタイトルトラックは存在せず、アルバムタイトルのように 4 つの楽曲が収められたシングル全体に「四次元」というタイトルを冠している。それにより 4 つの曲を通してのコンセプトが見えやすく、ミニアルバムと呼んでもいい聴き応えすら感じられる。装丁も通常のシングルより豪華でアルバムを思わせる作りになっている。これまでにない形での発売となった「四次元」だが、これを戦略と呼べば、大成功だったのではないかと思う。初動 56.9 万枚は今年一番の初動売り上げを記録し、トータルではミリオンも超える可能性もあるだろう。去年のミリオンは 0 枚、一昨年は「世界にひとつだけの花」1 枚だけという冷えた音楽業界においてひさびさのビッグヒットになることを期待している。最近のヒットの傾向としてはじわじわと長い間売れ続けミリオンに到達するという形（平原綾香の「Jupiter」のような）、もしくは今が旬というミュージシャンが映画のヒットと連動する（オレンジレンジ「花」、平井堅「瞳を閉じて」）ような）場合であり、すでにブレイクしているミュージシャンの歌をなかなか固定ファン以外に売るのは難しい。そこに「売り方」という戦略が登場する余地も出てくるのだと思う。

ミスチルに関していえば戦略なんてなくても売る実力をかれらは確実に持っている。ましてかれらの目指すものは「売り上げ」ではけっしてないだろうし、「売れる」ことのマイナス面もきちんと認識しているだろう。そう思いつつ売り上げに一喜一憂するファン心理というものもまた存在するのだ。

「四次元」を聴いた感想をひとつ書けば、ミスチルは「相変わらず」という感じだ。曲によっていろいろ切り口は変わるけれど、きっと根底にあるものは変わらない。根底にあるものを握り締めて、Mr. Children というバンドは歌い続けていくのだと思う。

いっしょに生きていく水。

**POCARI
SWEAT**

生まれたての僕らの前にはただ
果てしない未来があつて
それを信じていれば
何も恐れずにいられた
そして今僕の目の前に横たわる
先の知れた未来を
信じたくなくて
目を閉じて過ごしている